

校正の役割と校正者の役割

大内 泰輔

校正の目的は、『新編 校正技術 上巻』のはじめにも書いてあるように、①誤植・組み落ち・組み誤りなどを直すこと、②原稿の明らかな誤りを直すこと、③体裁上の整理を行うこと、ということになるだろう。この三つの目的すべてを果たすために、原稿引き合わせ、素読み、体裁チェックという作業を行う。これにより、出版物の品質が保たれるのであり、そこに校正の役割が求められるということはいまさら言うまでもないだろう。

では、編集・製作の一連の作業において、校正者には校正だけが求められるのかといえば、そうでもない。現在、私は常勤の勤務先をもつていて、そこで働かせてもらっているが、印刷所からゲラが出た段階においてもなお、内容上の不備や文章の稚拙さが残っていることが少なくない。このチェックも陰に陽に期待されるのである。

「それは、入稿前に執筆者と編集担当者がすでに完了させている仕事だろう」と思われるかもしれない。筋論としてはまったくそのとおりなのだが、困ったことに、企画立案、原稿執筆、原稿整理のいずれか、またはそのうちのふたつ、最悪の場合はそのすべてが不十分であることがままある。

こうしたことが生じる理由はいくつか考えられるのであるが、一番大きい理由は、原稿を依頼された執筆者は「文章の細かな不備や内容のチェックは編集でするだろう」と考えて、十分な裏をとらないで大きなことを書いてみたり、あるいは多忙を理由に真剣に執筆しようとせず、編集者は「内容上のは執筆者でわかっているだろうし、文章の不備は校正者も見えてくれるだろう」と考え、まともに原稿整理しようとしないうことによる場合、つまり、この両者とも文章に対して主体的な責任を認識していない場合である。

それでも、「そもそも、内容のことは文章も含めて執筆者のものだし、仮に不十分な点があるとすれば、それは編集者が執筆者と掛け合って適切な内容に仕上げていくものであって、校正者が口をさしはさむべきことではない」とおっしゃる方もいるだろう。それもまったくそのとおりで、私もできればその立場で、純粋に校正をやっていたところだが、工程全体が見えるとも開き直れない。なぜなら、内容に不備があったり、文章が伝わりにくかったりした場合の最大の被害者は、商品として買ってくれるお客さんであるからだ。そのため、内容の不備や文章の稚

拙さがあれば見逃すわけにもいかず、指摘することとなる。

かくして、校正者と呼ばれていながら、内容や文章のチェックという品質管理全般を見ることがするのである。しかも、印刷所に原稿が回りゲラが出るころには、だいたいスケジュールも詰まってきたため、編集担当者や執筆者が改めて話し合うという時間はまじないから、企画を理解し、裏をとって、前後の整合がとれた文章になるようリライトするところまでやる羽目になるのである。

製作工程全体のなかで「校正者」としてどこまで役割を果たせばよいのか、常に悩むところである。校正者として忠実たらんとすれば、冒頭に掲げた校正のみを負担すべきであるが、もう一方でお客さんも見なければならぬ。判断の基準が難しいところであるが、私は「執筆者が伝えようとしていることを、お客さんに最も良い形で、ダイレクトに伝える」という点に一応の基準を置く。ただし、この場合でも、言うまでもなく、私心を入れてはならない。自分が満足するものを作るのではなく、執筆者とお客さんが満足するものに力添えをする、ということである。

『新編 校正技術 上巻』の八ページに、校正は受身の仕事であることをわきまえて仕事をすべきである旨が書かれている。厳密な校正という範囲を越えていることを感じながら、「受身の仕事」の部分でかろうじて、校正者としての分を守っているつもりである。